

ONE LOVE 通信 50号

2013年9月28日発行

ワンラブ通信、記念すべき50号です！ここまで来るのに紆余曲折17年。ある時は年に1度しか出せなかったり、勢い余ってたくさん出したり…。そんな怪しいNGOが活動を続けて来られたのも、一重に皆さまのご支援があったからです。こんな私たちを見守ってくれて、どうもありがとう。
「ワンラブは不滅です！」と毎度言っておりますが、これからもその精神で続けていきたいと思ひます。どうぞよろしく！



【時間どおりに進まない】

ワンラブ通信、ついに50号となりましたが、やっていることは最初の頃とな〜んにも変わっておりません。いつになってもあれやこれやと落ち着きなく動く日々。精進を心がけてはおりますが、余裕のない毎日では、それもおぼつかない。一方ルワンダは94年の大虐殺以降、目覚ましい発展を遂げてはおりますが、こちらの人々の性格もさほど変わっていないように思ひます。

その最たるものは時間の感覚。日本人は時間どおりに動くことが日常になってしまっています。正確に到着する電車、レストランで注文しても比較的早く持ってきてくれる食事、役所などの待ち時間も短い。ところがルワンダ・ブルンジではなかなかそう行かないのであります。

毎年5月、ワンラブではレゲエの大御所ボブ・マーリーの死を偲ぶためにコンサートを開いております。今年もたくさんのミュージシャンを呼んで、盛大に開きました。しかしチラシに開演7時と書いてあっても、肝心のミュージシャンが来ておらず、それどころか未だにステージを組み立てている始末。もっともお客さんも遅れるのは当たり前とばかりに、まだほとんど来ていない。結局始まったの

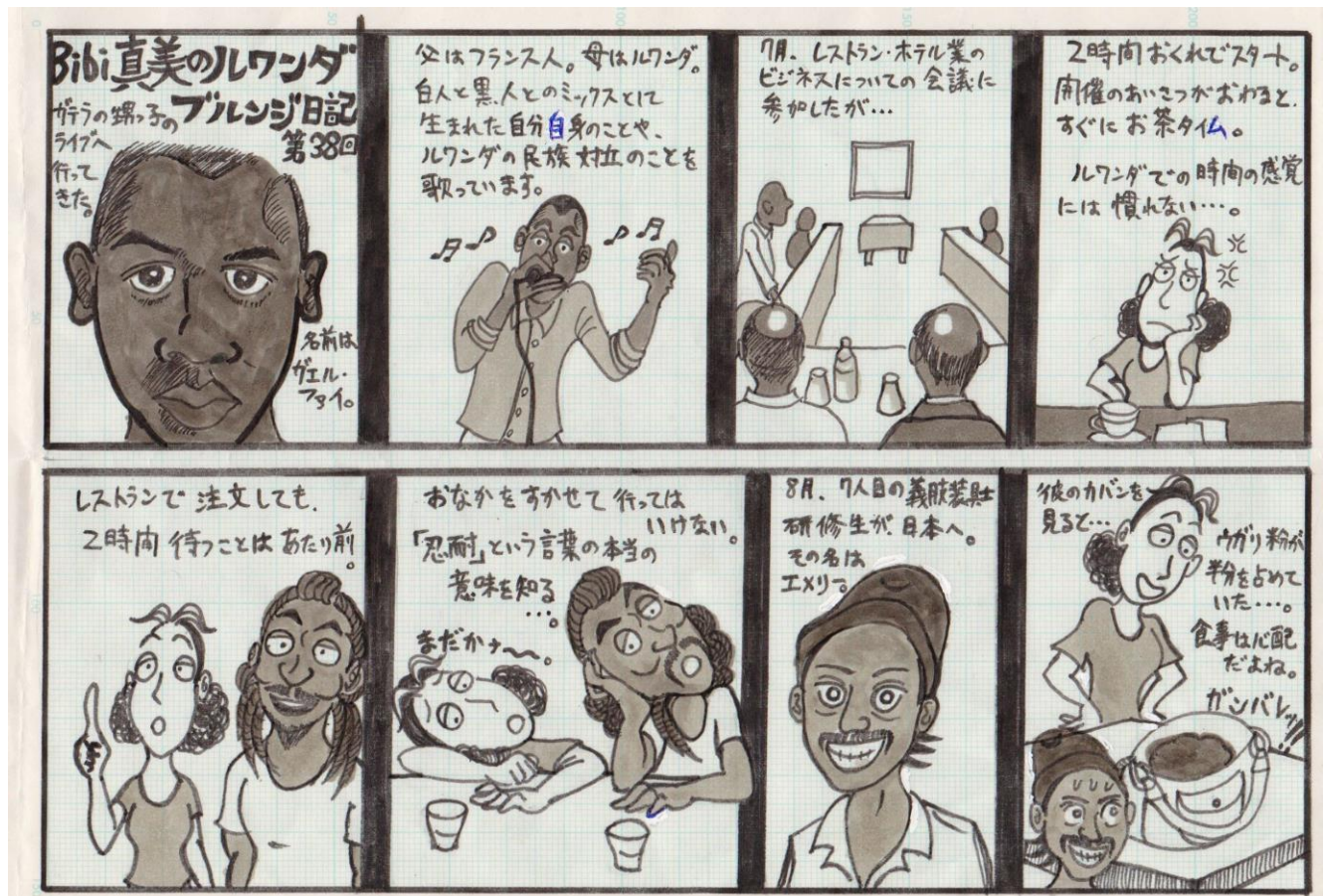
は2時間後。遅れてきたミュージシャンは悪びれる様子も全くなく、能天気な様子で演奏を続けています。

そしてまた別のある日。本日はレストラン・ホテル業のビジネスをいかに進めていくべきかと言う会議。場合によっては投資するスポンサーも探してくれるということで、朝ごはんもろくに取らず、意気揚々と会場へ。

しかし、ああ、しかし。いたのはたった一人の女性のみ。開催者すらも来ていない。あまりに誰もいないので、場所を間違えた思ったくらいだ。ため息をつきながら待つこと2時間。やっと会議は始まるのである。

しかもそれだけ遅れてスタートしたにもかかわらず、彼らが決して端折らないことがある。それは10時のお茶タイム。8時スタートの会議が2時間遅れ、つまり10時スタートで、開催のあいさつが終わるとすぐにお茶タイムだ。う〜む。そして何を話しているんだかまとまらないうちに、今度はランチタイムだ。おなかいっぱいになって、会議は再び始まるが、みんな眠くて、これまたまとまりのない話をする。そして3時のお茶。

会議をしに来たのか、お茶をしに来たのか、全くわからないまま会議は終わるのである。もちろんスポンサー云々



なんて話は全く出てこなかった…。これぞ不毛の時間である。

そしてところ変わってブルンジ。今年も7月末から8月にかけて巡回診療を行った。巡回診療にはいつもたくさんの方々が義足を求めてやってくる。型取りをした義足を必死に仕上げ、今日が最終日。首都ブジュンブラの工房に大臣を呼んで、義足や車いすの贈呈式を行う。彼らは派手なことや、形にこだわるのがとても好きですからね。前日には会場の飾りつけを終え、飲み物の手配も済み、あとは明日。

よし、朝から快晴。頭から水のシャワーを浴びて、最終チェック。大臣を一目見ようと、近所の人たち、遠くから障害者たちもやってきた。大臣が来るのは9時半。門の前で一張羅の服を着たガテラと私、そして関係者はスタンバイ。しかし…。来ないのですね。これがまた。来たのは12時近くになってから。日陰もなく、みんな炎天下ひたすら大臣を待つのであった。スピーチをする大臣には、お付きのものが後ろからそっと日傘をさしているというのに…。

…今日は一日贈呈式で疲れた。まあスタートは遅れたが、内容的にはますますだった。8割の達成感と共に、とにかく宴は終わる。が、遠くからやってきた障害者たちが、私たちが呼んだわけでもないのに、みんな口々に「帰りの交通費をくれ」と訴える。そんなことは知らん！勝手に来たんだから、勝手に帰れ！と最後には怒鳴る始末。だって交通費を払ってしまったら切りがない。すぐそこに住んでいる輩だって「俺にもくれ」と言い出すのは間違いないから。ふと振り返ると、会場の片づけをしているにもかかわらず、いつまでもいつまでもそこに残っておしゃべりする人たち。あの～、そろそろこの辺で帰ってもらえませんかと遠慮がちに言うものの、心の中は「え～い、暇な奴らめ！いい加減に帰れ～！」と毒づいている。



贈呈式に集まった障害者たち。しかし彼らの腰は重すぎで…。

今日は疲れたからご飯を作るのは面倒だ。だからどこかで食事をしよう。久しぶりにヤギの串焼きでも食べるか。「あ、私はお芋のフライとヤギの串焼き2本、それから冷たいビールね（アフリカでは「ぬるい」ビールを好んで飲む人がいるので、注文する時は必ず冷たいビールかぬるいビールかを伝えなくてははいけません）」

そして今日の出来事をガテラと話す。反省点やいつまでも帰らない人たちへの愚痴、義足を履いた人たちの言ってくれた言葉など。話すことはたっぷりある。

しかしおなかがすいているので、なんとなく気がそそろで会話に集中できない。おなかがすき過ぎて、ビールもあまり飲めない。そして時計を見ると、注文してから2時間

が経っている。

もう怒る気にもならない…。待つしかないのだ。アフリカのレストランは、おなかをすかせて行ってはいけない。空腹100%の状態で行ってしまうと、その後2時間苦しむことになる。だから2時間後くらいにおなかがすくだろうと予想した状態で行かなくてははいけないのである。アフリカで「忍耐」という言葉の本当の意味を知る。

こんな具合でルワンダ・ブルンジの時間はゆるゆると過ぎていくのでありました。



彼女も贈呈式にやってきたのだが、ローリングストーンズのTシャツがいかした。

私もルワンダと関わるようになって10数年。いろいろなことに慣れてきたと思うけど、時間の感覚は相変わらず日本人。スタッフの遅刻に目くじら立て、遅刻した分を給料からカットする月末の虚しさ。何故彼らは毎日10分遅刻するのだ？だったら10分早く起きて、間に合うように時間を配分できないのか？

しかしいろいろ考えてみると、どうもポイントは「2時間」と言うことであるらしい。多少の前後はあるものの、彼らが言う8時は10時にあたり、「今すぐ」と言う表現は2時間後であるようなのだ。それならば朝8時に始まる会議をお知らせするには「6時」と言わなくてははいけないのか？しかしそんなふうに伝えても、どうせ彼らは「6時に始まるはずがない。多分8時であろう。しかし8時に来る奴なんて誰もいない。だから10時に行けば間に合う」と言う勝手な解釈をするに違いあるまい。

それでも大虐殺後のルワンダで、褒めてあげたい彼らの変化がある。一番感心したのは、バスを待つ人たちが列をなしているということだ。以前はまったく秩序などなく、とにかくバスに乗ろうと団子状態であった。列を作るというこの変化は、我先にと割り込んでくるアフリカ人の習性の中では、非常に褒め称えたいルワンダ人の規律でありました。

こんな日々を過ごしていると、日本人って時間に厳しすぎるのかしら？と自分を責めたりもしてしまうのであります。本日の格言。郷に入っては郷に従え。

【希望の義足】

去年10月末のワンラブランドの水害は、前月号でお知らせしたとおりです。一通りの修理が終わり、通常の運営が再開しております。義肢製作所はワンラブランド内で引越しし、泥水に浸かってしまった材料や道具は、きれいにふき取り、油をさしました。でも材料の中には元通りにすることができず、泣く泣く廃棄したものもありました。非常に残念なことです。またパソコンも壊れてしまい、デー

タも消え、今までせっせと貯めていた障害者の記録も水の泡。こんなことがあると、やはり機械は100%信用せず、面倒でも嵩張っても紙の記録の方が安心です。もっとも紙の記録も、泥水のせいで読めなくなってしまったものも多々ありましたが。

営業を中止していたレストランも復活しましたが、長期にわたって閉めていたので、元通りのお客さんを取り戻すには少々時間がかかりそうです。

それでもまたこうして活動を始めることができ良かった、とホッとしたのもつかの間。日本からメールが届きました。

なんと！今度は日本で自宅兼事務所にしているところが水害に！上の階から水漏れ、我家にも被害が及んでいると言うではないですか！そしてその被害はさらに下の階まで及んでいると言う。つまりものすごいことになっているのでは？

この部屋、一月月に一度ボランティアの皆さんが集まり、いろいろな作業をするほかは、私たちがルワンダにいる間、通常は無人です。

そんな時にこのお知らせ。う〜、何故私たちばかり？こりゃ、本当にお祝いでもした方が良くはないか？しかし被害はいかばかりか？中のものはどうなってしまったのだ？想像は膨らみ、首の付け根がピンピン痛くなってきた。

と言うわけで、急遽大家さん（ワンラブの長年のボランティアS氏）に様子を見てもらう。水害ニュースを聞いてから、実際に見に行ってもらうまで数日。この数日は頭が痛いものなんのって。そして届いた被害状況。

ああ、神さまはいらっしゃいます！予想したよりずっと少なかった被害。そしてその惨劇を救ってくれたのは、な

んと一本の義足でした。

ワンラブは日本で活動のお話をする時に、実際に作った義足を見てもらったりします。何年前かにルワンダから持ってきました。その義足は部屋でスタンバイしています。何と言うことでしょうか！上の階から滴ってきた水を、その義足の足を入れる部分（ソケットと言います）が受けてくれたのでありました！（つまり雨漏りするところに、タライを置いておく状態ですね）

これって偶然？義足を作っているワンラブが、義足に救われたのです！あの義足がなければ、水は部屋一面に広がり、被害はもっともっとひどくなっていただろう！義足が被害を最小限にとどめてくれていたのです。



希望の義足たち。なんだかんだと、ワンラブはもう17年も義足に支えられているのだなあ。

ありがとう、義足よ！これを「希望の義足」と呼ばずして、何と呼ぼう。（ちなみに「希望の義足」とは以前NHKのプロジェクトXで取り上げられた時に使われたタイトル、そしてその後出版されたワンラブの絵本のタイトルです）その話をガテラにしたら、ガテラも笑ってた。彼も彼で、水害が続く不運を呪っていたのである。

う〜む、こんな形で義足に助けられるとは思ってなかったなあ。しかし助けてもらった分、これからも真面目に義足を作らなくてはいけないなあ。義足に借りを作られてし



ルワンダ事務所代表ガテラより

【All you need is LOVE – 愛こそすべて】

ある日、ラジオを聴きながら朝ごはんを食べていると、真美が言う。「それにしても何故世の中の曲の多くは『愛しているよ』とか『君を失って僕は苦しい』とか、好きだ嫌いだということばかり歌っているのだ？ほかに考えることはないのか？」と。

その答えは「だってそれが生きていくことの基本だから」なのではないか？

この世にはいろいろな形の愛がある。恋人同士の愛、夫婦の愛、親子の愛、友人同士の愛、挙げていいたら切りがないがどれも根本にあるのは「相手のことを愛しい」と思い、自分もそう思ってもらいたい」と言うような単純な気持ちに違いあるまい。そしてそれはどんなにお金があっても、そう簡単に手に入るものではない。もっともお金があれば、それ「らしき」ものは得ることができるが...

私たちが生きているこの世界では、その愛が得られないから起こってしまう犯罪や争いのいかに多いことか。

自分の考えている愛が十分に得られないと、無理やりにも手に入れようとして、様々な悪事を働くというケースは非常に多い。ルワンダの大虐殺もその例に漏れない。

いつの間にか自分の身分・身元を第三者に決定され、それが元でよい仕事に就けたり、また一瞬の後にその逆の仕打ちを受けたりした。愛情あるいは物質的な愛情を受けられず、突然手のひらを返したようにその愛を向けられ、今まで虐げられてきた憎しみを倍にして相手に返そうとした。それがルワンダの民族対立の元だった。これも愛の喪失あるいは欠乏から起こった悲劇と言って間違いのないだろう。

だからこういった出来事をなくすために、愛し愛されることが絶対必要なのだ。突っ張っている人だって、愛されれば気持ちがいいし、心も安らぐ。当たり前のことではないか。

ね、好きだ嫌いだということは生きていくうえで切り離せないのです。だから世の中の人々は「愛してるよ」とか、そういうことを歌うのだ。

All you need is LOVE 愛こそすべて

それにしても今朝の味噌汁はなんだかぬるい。真美の愛情が冷めてしまったのだろうか...？

まった。まあ、とにかくありがたや、ありがたや。

結局被害は天井部分（これは保険でカバーされるらしい）、ルワンダから持ってきたバナナカード数十枚（残念だけど、これくらいで済んだらオッケー）。その他濡れてしまいカビが生えた木彫りのお面やワンラブ製Tシャツもあったようだが、そんなもの乾かしてしまえば大丈夫。

湿った部屋はその後ボランティアの皆さんが入れ替わり立ち替わり訪れてくれ、風を通してくれたので、こちらも問題なし。本当に神さま、義足さま、ボランティアさま、ありがとうございました。

しかし2度続いた水害、やはり一度お祓いをしておいた方が良さそうであるぞ。2度あることは3度あるとは思いたくないし。

【災難は続く…】

が、しかし、どうもやっぱり不運が続いていると言うのは間違いない。最近、夜寝て朝起きると電気がつかないことが多い。停電である。

停電の種類はいくつかある。配線が何かの手違いで切れ、電気がつかない場合。そして電気代を払っていないので、電気を切られたという場合。ルワンダでは電気代前払いのことが多く、払った電気代分の電量を使いきってしまうと、容赦なく電気が止まる。うっかり補充し忘れることもあるので、まあ、これはよくあることである。

が、昨日払ったばかりだぞ。まだ十分に電気は残っているはずだ。

ワンラブで働いている電気技師に聞くと、夜中ワンラブに引かれている電気ケーブルが盗まれたから、電気がつかないとのこと（彼らはケーブルを盗んで、闇市で売るので）。こんちくしょう、盗人め！文句を言いながら、仕方なくケーブルを買い直し、とにかく電気を確保する。

そして数日後。再びケーブルを盗まれ、仕方なくケーブルを買い、電気をつなげる。

更に数日後。草木も眠る丑三つ時。何やら外が騒々しい。ワンラブの警備たちが騒いでいる。どたばたと走り回る足音もする。ついにケーブル泥棒を捕まえたのである！あっぱれ警備の皆さん、良くやった！

と褒め称えるのはここまで。彼らはいわゆる罪人を手加減なくこっぴどく痛めつける習性がある。捕まえた泥棒を殴る蹴る。そして朝が来て、警察に突き出したのだが…。

その泥棒、かなり怪我を負ってしまい、病院に連れていくべしとのこと。レントゲンを撮り、治療を施し、結局その費用は全てワンラブ持ち…。確かに怪我をさせたのはうちの警備員だが、どうも納得がいけない…。怪我が痛むので、留置所にも入れられず、自宅待機。その代り明日怪我が落ち着いたら、盗人自ら警察に出頭せよということらしい。更に彼のために私たちが薬も買うべしということだったが、ケーブルを毎度盗まれている私たちとしてはあまりに悔しく（だってケーブル代だって安くはないのですよ！）、明日本当に出頭したら薬を買ってやると言い残し、彼を自宅に連れて行った。

そして次の日。警察で彼が来るのを待っておりましたが、当然やっつては来ませんな。そりゃそうだ、盗人にとっては逃げるチャンスを得たようなもの。わざわざ自分から「泥棒でございます」などと名乗るわけではない。え〜い、怪我をさせたのは悪いとは思いますが、来ないのなら自分で勝手に薬を買え！その代り今度捕まえたら闇に葬ってやる！と過激なことも言いたくなるのだ。

しかしまあ、それ以来、夜中電気ケーブルを盗まれると言うことはなくなりました。めでたし、めでたし。なのかなあ？だが、油断は禁物だぞ。



今号の患者さん

前号に引き続き、義手を渡したクリスティーンのお話。

義手を渡してから数カ月、日本の新聞記者がワンラブのことを記事にしようとやってきた。目に留まったのは、クリスティーンだった。

私たちは義足などを渡す時、患者さんに必要以上に生い立ちを聞かない。それは心の傷を抱えている人も多いから、あえてその傷を刺激したくないからだ。でも今回は新聞の記事と言うことで、クリスティーンの話をしじっくり聞いた。

94年当時、彼女は12歳。妹と弟が5人いた。お父さんは洋服を縫う仕事をしていた。注文も多く、近所でも評判だった。しかしそんな平和な生活は長く続かなかった。大統領の乗った飛行機が撃墜されることによって、国の治安があつという間に乱れ、59年から続いていた民族対立が再び始まってしまった。94年4月、大虐殺が始まってすぐ、お父さんは殺されてしまったそうだ。迫りくる追っ手。このままではみんなやられてしまう。危険を感じたお母さんは、せめて子供だけでも助かってほしいと大声で叫んだ。

「逃げて！殺される！」

妹弟を連れ、丘に逃げ込み、身を潜めた。でも時間が経つにつれ、おなかがすいてきた。幼い妹や弟も泣きだしてしまった。ここには何も食べるものがない。それにお母さんのことも心配だ。

「家に戻ろう」そう思ったクリスティーンは登ってきた丘を降り、家に向かった。そこで目にしたのは、世にも悲しい光景だった。長女のクリスティーンでさえまだ12歳。妹や弟はもっと幼いのに、この光景を見ることになる。みんなで仲良く住んでいた家は壊され、優しかったお母さんも変わり果てた姿になっていた。一体どういうことなの？何が起きているの？

民兵たちは戻ってきた彼女を見て「お前はチャールズ（父の名）の娘だな？」と叫びながら襲いかかってきた。

想像を絶する恐怖の中、必死に走ったが大人の足にはかなわない。妹を背負って逃げていた彼女はたちまち追いつかれ、振り下ろされた銃の犠牲になったのである。おんぶ

紹介します！ワンラブのスタッフ

されていた妹は肩を切られ、クリスティーンは顔を切りつけられ、耳を失い、手先を半分失った。

その後しばらくして、ルワンダ愛国戦線が助けに来て、一命を取り留めた。復興を目指すルワンダの新しい政府のもと、ある組織に学費を出してもらって、大学で学ぶこともできた。

当時幼かったので、何故彼らがそんなふうにな人を殺すのか理解できなかったが、今は彼らがとても悪い心を持った人たちだと思っている。何て愚かな殺人者たち。私たちは何も悪いことをしていないのに、お父さんもお母さんも殺されてしまった。

あれから19年。大学を卒業し、今は仕事を探しているところである。本当はもっと勉強をしたいが、今度は自分の妹弟が勉強をする番だ。彼らも勉強をしたがっている。

でも障害を持った彼女にとって就職は難しい。義手を手に入れ、心機一転ではあるが、どうしても片手であるため、みんなのように早くパソコンが打てず、試験で落とされてしまう。だから人に雇われるのではなく、自分で自由に動けるように商売を始めたいと思っている。それならば人と比較されることも少ないだろう。ルワンダ人は車が好きだし、車の部品を扱っている商売をしている人たちは結構儲かっている。だから車のスペアの商売をしてみたいな。

時間は戻すことができない。確実に前に進んでいる。この19年間、ルワンダは経済的に発展してきた。昔のルワンダは、今のルワンダではない。学校で教えられたツチ族・フツ族・トワ族などと言う民族の区別もなくなった。貧乏な人も金持ちも、みんな幸せになりたいと願っている。こんなことが二度と起きないように、民族によって人が区別されないように、遠い未来を見つめていたい。そう語るクリスティーン。



笑顔を見せてくれたクリスティーン。それにしても良くできている彼女の左手。

初めて会った時は、顔の傷を見られるのが嫌なのか、始終うつむきながら話していた。そして半分しかない手をポケットに突っ込み、あるいは机の下に隠し、どこか暗さを感じさせる女性だった。

この義手によって全てが良くなったわけではないけれど、この時会ったクリスティーンは、しっかり私の顔を見ながら話をしてくれたし、テーブルの上で〜んと手を乗せて話していた。そして嬉しいことに、私の肩に手をまわして、一緒に写真を撮ってくれた。

新聞記者が「辛い質問ばかりしてごめんなさい。」と言った時、彼女の答えに私の心が震えた。「自分の過去を隠したくない。言わないで黙っている方が余程辛い。話したことによって、私は心が休まるのよ。」と言う答えだった。

今年8月、7人目の義肢装具士（見習い）が日本にやってきました！

過去6人を神奈川県海外研修員受入れ制度によって、義肢製作の研修を受けさせることができました。残念ながら去年は応募したものの、経験が少なかったため選考から漏れ、悔し涙を流したのだが…。しかし今年再度挑戦し、合格したのであります。

その名はエメリー。23歳の青年である。何故かみんなからは「フォンダシオン（基礎）」というニックネームで呼ばれている。小柄で、全体がちっちゃくまとまっているが、時々無精ひげ様のものをはやしており、とっちゃん坊やがひげを生やしているようにもみえる。



真ん中のちっちゃい青年がフォンダシオン。初めての海外にドキドキ。

実は彼はガテラの親戚にあたる。両親をルワンダ大虐殺によって失い、幼い頃からガテラが彼の学費を支援していた。だから私も子供の頃から知っている。あんなに小さかった子がねえ…と、母親のような気持ちなのだ。

初めて外の国に行くので、研修の話をする、くっとうに力が入っていた。わからないことだらけだと思うのだが、何かわからないかと言うこともわからないような、そんな初心な感じを受けた。

一緒に日本大使館に査証を取りに行き、何か質問されても、何をどう答えて良いのかわからず、私のことをチラリと見る。う〜ん、あまり手助けをしても良くないと思いつつ、横から口を出してしまう。

彼が日本に出発する前日、私はブルンジからルワンダに戻った。そして準備はできているか部屋をのぞくと、そこには力なく横たわっているフォンダシオンの姿が…。むむむ、どうしたのだ？どうやら緊張しすぎて体調を崩してしまっただけ…。あるいは知恵熱か？

次の日、熱も下がり何とか行けそうである。体調を崩したことをガテラに伝え、もしかしたらマラリアかもしれない、マラリアなら日本で治療薬が手に入りやすいから、ルワンダで買って、持っていきなさいと言う。多分これもガテラの親心のようなものなんだろうなあ。

そんな状態ではありましたが、空港まで連れて行き、行ってらっしゃ〜い。

彼の詰めたカバンの中をのぞいてみると、日本では手に入らないキャッサバの粉（ウガリ粉）が半分を占めていた。やっぱりあなたも日本で何が食べられるか心配なのね…。

【ひとりごと】

時々自分の感覚がアフリカっぽくなっているなあと感じる時がある。これから書くことはアフリカにかかわったことがある人は、なんとなくうなずくのではないかと思うのだが、二つ例をあげたいと思う。

その①：コーヒー、紅茶などに入れる砂糖の量が劇的に増えた。アフリカの人たちは、普段お菓子とか甘いものを食べる習慣があまりないせいか、紅茶などに入れる砂糖の量は半端ではない。カップの半分近くまで砂糖を入れ、本当にそれは溶けるのか？と思ったこともしばしば。あまりにたくさん砂糖を入れるので、お客さんが来ると砂糖を隠してしまうこともあった。そしていつの間にか彼らと同じように、たっぴりと砂糖を入れている自分に気がつく。

以前、ブルンジから太鼓をたたくグループが来日した時、そのお世話をしたことがある。彼らが日本の緑茶に砂糖を入れるのを見て、のけぞった記憶があるが、その行為も今では納得してしまう。

マクドナルドなどでコーヒーに入れる砂糖をつけてくれるが、全く少なくて不満を感じるの、きっとアフリカにかかわったことのある人であれば理解してくれるだろう。あんな少しの砂糖を入れたって、味なんか変わりゃしない。その②：ブルンジでちょっと時間があき、しゃれたホテルのプールサイドで一休み。その時“NIKE”と書いてあるTシャツを着ている人がいた。

それを「ニケ」と読んでしまったら、それはもうアフリカ感覚がからだに入り込んだと理解して良いと思う。本当はあのスポーツ用品メーカーの「ナイキ」ですね。

アフリカの（東アフリカなのかな？）言語は書かれているものをローマ字読みすることが多いように感じる。だからルワンダの人があれを読むと、ナイキではなくニケなのです。

プールサイドでそのTシャツを見て「ニケって何だろう？」と思った瞬間、自分の読み間違いに気がつき、う〜むと唸ってしまった。

こうしてだんだんアフリカの皆さんの感覚に近づいて行っていると思う反面、どうしても彼らの時間感覚にはついていけず、自分は今どっちに近いのだろうと悩んでいる日々でもあります。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させていただきます。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 TEL: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト



日本事務所より

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信49号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（3月～7月）。

3月	円
4月	円
5月	円
6月	円
7月	円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。

義足	89本
装具	36本
杖	439本
車いす	25人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？切手に換えたり、現金化して活動に役立てます。

特に書き損じはがきは助かります。皆さまからいただいたはがきのおかげで、この数年、ワンラブ通信を発行するための切手を買わずに済んでおります。

今一度、机の引き出しなど探してみてくださいませ。

【物資のご支援ありがとうございました。】

引き続き輸送費ご支援のお願い】

物資の支援をお願いしていましたが、現在受け入れを見合わせていただいております。ご協力くださった皆さま、本当にどうもありがとうございました。

集まった物資は再度内容をチェックし、種類や数などのリストを作り、ルワンダへ向けて輸送する予定です。ただ現時点で、コンテナのどのくらいの量になるか正確に把握していないため、もしも物資を支援したい！という方がいらっしゃいましたら、下記メールアドレスまでご連絡ください。臨機応変に対応していきたいと思っております。

現在の問題点はルワンダまでの輸送費。また十分な輸送費用が集められておりません。コンテナを輸送するための費用については、引き続き業者などと相談し、適当な方法を検討していきます。

日本からケニアのモンバサ港まで約60万円、ケニアからルワンダまでの陸送費用また通関費用として同額の60万円、合計120万円を想定しています。

皆さま、ぜひコンテナ輸送費のご協力をお願いいたします。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。

ワンラブ通信50号 2013年9月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

